

楓園

ISSUE
2026 6/1

102

FÜEN [フウエン]
Toyo Eiwa Jogakuin
Public Relations Report



東洋英和女学院
東洋英和楓の会



特集 1

新しい体制で迎える春

特集 2

世界とつながる、その原点はクリスチャン・フェローシップ
東洋英和の国際協力

新しい体制で迎える春

新大学学長 就任挨拶

東洋英和女学院大学学長
藁谷 友紀



4月を前にして緊張の度合いが高まっています。プロテスタントの理念と向かい合う故の緊張でしょうか。学生時代には、16～17世紀の宗教音楽曲を歌っていました。定期演奏会で「客演演奏」くださった河野和雄先生(元学院オルガニスト)のパイプオルガンに感激しました。留学先のポンは、カトリックの地にあるプロイセンの飛地。建築家シンケルの空気がただよっていました。その後のベルリンはプロテスタントの社会そのものでした。

緊張を感じるのは、女性の大学だからでしょうか。活き活きと人生を切り拓く女性の姿に驚いたのはやはりドイツ。日本では、男女雇用機会均等法が成立した時です。私に根ざす「信念」。法律や制度上の「機会均等」「男女平等」は譲れません。しかし、性差をなくす「平等」の上位に、女性としての(言うまでもなく「として」の内容を問わなくてはなりません)アクティビティがあります。「女性労働の『活用』」ではなく、女性は閉塞状況を打開する主体です。

東洋英和女学院の一員に加えていただく、その喜びと心の張りが、私の緊張の中身かもしれません。そう考えると緊張の有り様は悪くありません。校地で道がわからなくウロウロしているかもしれません。お声がけください。

(2026年3月)

Profile

わらがい ともき ●早稲田大学政治経済学部卒業。留学したボン大学にてDr.rer.pol.を取得。1994年より早稲田大学にて教鞭をとり、2001年教育学部教授。同大学評議員・常任理事等を歴任。早稲田大学名誉教授。2026年4月、東洋英和女学院大学学長に就任。

新かえで幼稚園長 就任挨拶

大学附属かえで幼稚園長
永瀬 真澄



4月よりかえで幼稚園長の重責を担わせていただくことになりました。かえで幼稚園は学院の方々、多くの方のお祈りに支えられ創設54年の歩みの中にあります。「敬神奉仕」の学院標語のもと、東洋英和の保育理念の具現化の場として子どもたちの幼児期を保護者の方とともに紡いできました。子どもを取り巻く社会の状況は大きく変化していますが、今まで重ねてきたことを守りつつ今の時代に必要な保育を神さまの示してくださる道を信じ、かえで幼稚園につながる方とご一緒に創り出していきたいと思っています。

私は30年以上キリスト教保育に携わってまいりました。その間子どもたち、保護者、保育者と多くの出会いがありました。年月を重ねても日々、学ぶこと、気づかされるものがたくさんあります。幼稚園の生活を通して成長をしていく子どもたちの姿は私にとって大きな喜びです。時折、大人になって戻って来る卒業生がいます。その方たちは自分が幼児期に愛されて育ったことを思い出し、また日常の生活に戻っていきます。かえで幼稚園がたまプラーザの地にあって、神さまの愛の中に育まれていく場としての使命を果たしていけるよう歩みたいと願っています。

Profile

ながせ ますみ ●東洋英和女学院短期大学保育科と専攻科で保育を学ぶ。教会付属幼稚園等勤務を経て、2001年かえで幼稚園に着任。クラス担任として子どもとの生活を楽しむ。2026年4月、東洋英和女学院大学附属かえで幼稚園長に就任。

Contents

表紙: 世界で活躍する英和生たち

P.01 [特集 1]
新しい体制で迎える春

P.03 [特集 2]
世界とつながる、
その原点はクリスチャン・フェローシップ
東洋英和の国際協力

P.09 From the Garden of Kaede
楓の園から [学院 NEWS]

P.15 Cartmell's Prayer
[宗教教育委員会]

P.17 教員紹介

P.19 学院人事

P.21 東洋英和楓の会

「楓園」について
皆様のお声を
聞かせてください。



2026年度を迎え、新たな体制がスタートいたしました。

長い歴史の中で育んできた伝統を守りながら時代に即した教育のさらなる充実を図るため

幼稚園から大学院まで、教職員一同、精進してまいります。

今年度もご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

前大学学長 退任挨拶

前東洋英和女学院大学学長

星野 三喜夫



東洋英和女学院大学の学長に就任してから瞬く間に4年が過ぎました。何はともあれ重責を全うすることができましたのも、ひとえに学院並びに大学関係者の皆様のお支えがあったからこそ心から感謝しております。この間、精一杯の努力を重ねてまいりましたが、目に見える成果につながらなかった部分もあったと思います。

高等教育を取り巻く環境は想定以上の速さで変化し、大学の運営は厳しくなるばかりです。しかし、学院標語である「敬神奉仕」の精神を受け継ぎ、その礎の上に「専門性」に根差したりベラルアーツ教育を実践している本学の良さは変わりません。「女性はこうあるべき」といったジェンダー・バイアスに捕らわれることなく、学生一人ひとりに寄り添い、豊かな学びを通じて広い世界で生きる力を培う本学は、変化する時代のニーズや社会の要請に応え、男女共学にはない学びの環境と価値を提供しています。女性が主体の一貫教育の最終段階に位置する本学の教育環境が守られることを願って止みません。

末筆になりましたが、神さまのお導きにより、歴史と伝統がある学院の着実な歩みがこれからも守られますよう祈念しております。皆様、どうぞごきげんよう。

Profile

ほしの みきお ● 早稲田大学法学部卒業。日本大学大学院総合社会情報研究科博士前期課程修了。東京銀行(現三菱UFJ銀行)等を経て、2018年より新潟産業大学学長。2022年に東洋英和女学院大学学長に就任。同職を4年間務める。

前かえで幼稚園長 退任挨拶

前大学附属かえで幼稚園長

山下 久美



実は、かえで幼稚園の園長という大役は、たとえ2年間でも私ごときに果たせるはずがないと就任前は考えていました。今、退任に際して振り返り、神さまのなさることは不思議に満ちていると思います。

大学附属かえで幼稚園は、長年のキリスト教保育者養成の歴史の中から生まれました。そうであっても古きに留まることなく、大学(短大)と共に今、目の前に居る子どもたちのために研鑽を積み、より良き保育を目指して歩み続けています。子どもたちへのキリスト教を基盤とした質の高い教育(保育)への使命は、六本木にある幼小中高部も変わりませんが、かえで幼稚園にしかない使命と役割もあります。それは地域の家庭への子育て支援、保育者養成、そして地域の誰でもが参加できる美しが丘礼拝などのキリスト教に触れることができる場の提供です。その働きは学院の礎を築いた宣教師たちから求められてきたことだと思えます。学院の中で育まれ与えられた「敬神奉仕」の精神は、多くの卒業生たちによって、かえで幼稚園という一つの形となっていることに、気づかされます。

そのような場に身をおくことができたのは、多くの方のお支えがあってこそと、深く感謝申し上げます。

Profile

やました くみ ● 東洋英和女学院中学部、高等部、短期大学保育科卒業。保育者として15年程勤務。2005年埼玉大学教育学研究科修士課程修了、同年東洋英和女学院大学人間科学部講師に着任。2009年准教授。2024年よりかえで幼稚園園長を2年間務める。

聖書の言葉



しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

(マタイによる福音書 第5章 44-45 節)

恵みの雨はすべての人に降り注ぎます。潤いが必要なのは体や植物だけではなく、心が柔らかければ異なる意見を持つ相手を尊重することができます。御言葉は日々降り注ぎ、神さまの愛に潤され祈りも生まれます。愛し祈りなさいは命令ではなく神さまと共にできるという希望です。

日本基督教団 総幹事 網中 彰子(1987年高等部卒業)

世界とつながる、 その原点は**クリスチャン・フェローシップ** 東洋英和の**国際協力**

東洋英和には、国際協力や社会活動に取り組む在校生が多い。英和生たちは日々の学びや出会いを通して、他者を思いやり、さまざまな課題と向き合う姿勢を育んでいる。その経験は、世界のために何ができるかを考え、よりよい未来を共に築こうとする思いへとつながっている。

国際協力の本質とは何か——。座談会は、河野 毅教授が紹介する聖書「ローマの信徒への手紙」の一節から始まった。「聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」と続くこの聖句は、分断や偏見が深まる現代に響くメッセージといえる。

この聖句を受け、参加者たちは国際協力に関心を持ったきっかけや、偏見を超えた出会い、異なる文化や社会への視点、そして将来の展望について語り合った。

経験が「気づき」に変わるとき 国際協力への道が拓かれる

参加者たちは、経験を通して得た「気づき」によって、見える世界が変わっていった過程について語った。

最初に語られたのは、JICA海外協力隊として国際協力の現場を肌で感じた経験だ。

「派遣国では、電気や水へのアクセスが困難であり、子どもたちの野外排泄も当然のように行われている環境でした。このような環境下でスポーツの充実を考えることを通して、国際協力は社会に貢献するだけでなく、自分の役割や生き方を見つめ直す機会にもなると感じました」(原賀さん)



「私の場合、高校時代に修学旅行で韓国を訪れたことが、国際協力に興味を持った原点です。当時は韓流という言葉もなく、反感を持たれているのではと勝手に思い込んでいましたが、実際には現地の方々が優しく接してくれました。同じ頃、アメリカの同時多発テロ事件やアフガニスタン戦争、イラク戦争が起き、偏見を乗り越えることの必要性を強く感じたことが今の自分の活動につながっています」(大久保さん)

社会格差を目の当たりにした経験が、行動のきっかけになったという声もあった。

「タイに行ったとき、高層ビルの隣にスラムがあり、私より小さな子どもたちが歩道橋の下で隠れるように暮らしていました。たった数メートルしか離れていないのに、観光客の自分と彼らとの違いに衝撃を受けた経験が、YWCAに参加するきっかけになりました」(木ノ原さん)

学校での学びや活動から、国際協力への関心を育てた生徒もいる。

「授業でSDGsを学んだことをきっかけにコーヒープロジェクトに入りました。ドリップバッグを買ってくれた方



座談会の参加者たち

や、コーヒーの産出国であるパナマやエルサルバドルの大使館の方と話すことで、外部に発信する力が鍛えられ、国際協力に対して親近感を持つようになりました」(馬場さん)

「私は、人権活動家であるマララ・ユスフザイさんの本を読んで、貧困や戦争の現実を知りました。その後、TEAM+(Toyo Eiwa Activities for Myanmar+)で活動する中で、多くの人がミャンマーや東南アジアの状況を知らないことに気づき、まずは知ってもらうことが支援の第一歩だと感じています」(勝亦さん)

参加者の経験を受け、河野教授はSDGs策定に関わった自身の経験を踏まえて語った。

「SDGsには17のゴールがありますが、どれも単独では成り立ちません。例えば『安全な水とトイレ』は『健康』とつながっています。トイレが不衛生だと健康にも影響しますし、貧困の問題にも関わります。つまり、SDGsは世界全体で取り組むべき課題で、どの国も無関係ではありませんが、達成状況は十分とはいえません」

また、河野教授は、アメリカのスーパーボウルで掲げられた「憎しみより強いものは愛である」というメッセージにも触れ、偏見を乗り越え、直接の出会いと交流を大切にすることが国際協力の原点であると強調した。



国際協力の専門家である大学の河野教授がファシリテーターを務めた



海外ルーツの大学生、大学院生、中高部の生徒と、幅広い参加者によって座談会が行われた

共に食することでほどける偏見と 見えてくる相手の素顔

視野が広がると、相手に関わりたいという気持ちが生まれる。そのきっかけとして挙げたのが「食」だ。

「フィリピンのセブ島で炊き出しをしたとき、子どもたちがきちんと列に並び、周りに譲ろうとする姿が印象的でした。『もっとほしがるのかな』と思っていた自分の偏見に気づかされて、食によって相手のさまざまな表情や一面が見えてくると感じました」(山村さん)

「エルサルバドル大使館の職員の方々が高中部に来校し現地の料理を振る舞ってくださり、その国の味を知ることで文化に対する理解がより深まりました」(馬場さん)

河野教授も、食が持つ力を信じていると語る。

「私自身、一緒に食事をするだけで相手との距離が縮まった経験が多くあります。食は、言語や文化の違いを超えて人を結びつける、最も身近な国際交流だと思います」

Profile



原賀 祥乃さん

東洋英和女学院大学大学院
国際協力研究科1年

中学校保健体育教諭。埼玉大学卒業。公立中学校教諭を経て、現在は国立大学附属中学校に勤務。JICA海外協力隊(マダガスカル派遣)として2年間の国際協力活動を経験した後、現職に復帰。



大久保 和正さん

東洋英和女学院大学大学院
国際協力研究科1年

国際交流基金勤務。大阪大学外国語学部卒業(専攻は朝鮮語)。日本語教育支援部企画調整チーム、ケルン日本文化会館などを経て、現在は国際対話部で市民・青少年交流に従事。



クウェレベタ・ エマニュエラさん

東洋英和女学院大学 国際社会学部
国際社会学科3年

東アフリカマラウイ共和国生まれ。2016年、博士号を取得する父と共に来日。母語はチェワ語、公用語は英語。将来、母国マラウイの美味しいコーヒーを広めたいと考えている。



横山サリナス・クラウディア・ アレクサンドラさん

東洋英和女学院大学 国際社会学部
国際社会学科2年

南米ペルー共和国生まれ。父が日系ペルー人、母がペルー人。2018年、母国の政治不安を避けるため来日。中学1年から日本で教育を受ける。将来、国際機関で働くことを目指している。

※参加者の所属・学年・役職等は、座談会が開催された2026年2月時点のものです。

視点を変えることで見えてくる 日本社会の強みと課題

海外にルーツを持つ参加者は、自身の背景を踏まえて日本社会について意見を述べた。その言葉からは、社会を多面的に捉える視点の大切さが浮かび上がった。

「日本に来て驚いたのは、交通網が発達していて、時間が守られていることです。マラウイの交通手段は主にバスですが、時間通りに来ることはほとんどありません。一方で、日本にはまだ男女格差があり、改善すべき点だと感じています」(エマニュエラさん)

「日本に来て感じたのは、教育や仕事の場で多くの機会が与えられていることです。母はペルーで弁護士をしており、政治不安から日本に移住しましたが、給料はおよそ倍になり、何より安心して働ける環境があります。ただ、選挙公約やSNSで移民に否定的な意見を見ることもあり、外国の状況を知らないまま理由もなく不安を抱く人が多いように思います。国際交流や異文化理解の教育の必要性を感じます」(アレクサンドラさん)

2人の発言を受けて、河野教授は続けた。

「異なる文化に触れると、それまで当たり前だと思っていた価値観を見つめ直すきっかけになります。そうした経験を通して自国や自分の背景への理解が深まると、相手に心を開きやすくなり、身につけた力を他者のために



中高部の生徒たちから多く語られたのは、東洋英和の授業や活動を通して得た気づき

生かそうという思いにつながります。こうした“自分を支える軸”と“他者を思いやる視点”を育てることは、東洋英和が大切にしてきた教育の根幹だと思います」

「内なる支え」が 誰かのために動く勇気を生み出す

東洋英和の教育の根底には、「一人ひとりに価値がある」というキリスト教にもとづく視点がある。河野教授は、その教育理念について語った。

「東洋英和には、神さまに愛されているという思いを大切にし、その気持ちを持って誰かのために力になりたいと願う人が多くいます。すでに行動している人はもちろんですが、まだ一歩を踏み出せていない人も、神の導きを信じてほしい。自分は神さまに愛される価値のある存在だという思いが迷ったときに前へ進む力となり、他者のために動く勇気が生まれると思います」

アレクサンドラさんは、家庭や学校で育まれた信仰が自分の行動の支えになっていると語った。

「私はプロテスタントの家庭で育ち、学校はカトリックだったので、両方の信仰に触れてきました。祖父母は食事の前に必ず祈り、『諦める前に神さまに力を願いなさ



Profile



木ノ原 ももさん

東洋英和女学院 高等部2年

YWCA、TEAM+で社会活動を行う。東京都が主催するアイルランド派遣や子ども政策・交流企画、港区の平和青年団など、学内外のさまざまな国際・平和活動に参加。



山村 優佳さん

東洋英和女学院 高等部1年

CECセブ島ボランティアに参加後、仲間8人でボランティア団体「Forever ∞(エイト)」を設立。日本の小学生が描いた絵本をセブ島の子どもたちに届ける活動を計画中。



勝亦 志帆さん

東洋英和女学院 中学部3年

ミャンマーをはじめとする途上国の課題や、国際支援・国際協力のあり方について理解を深めるため有志団体TEAM+に参加し、学内外での学びを広げている。



馬場 芽生さん

東洋英和女学院 中学部3年

コーヒープロジェクトに所属し、新しいドリップバッグの開発や、コーヒー豆の主要生産国であるパナマやエルサルバドルの大使・大使館職員と交流を行う。

い』と教えてくれました。実際に生活していて、困難な場面
で神さまに支えられていると感ずることがあります」

エマニュエラさんも、神さまの存在が行動の後押しに
なった経験を語った。

「教会のユースの集まりで、1人で座っている女の子
がいました。最初はためらいがありましたが、『話しかけ
てみて』という内なる声に背中を押されて声をかけまし
た。すると、彼女は当時とてもつらい状況にあり、私と話
したことで生きる勇気をもらえたと言ってくれました。神
様の導きが、自分を動かしてくれたのだと思います」

それぞれの経験が形づくる 将来への力強いビジョン

参加者たちは、それぞれの経験を踏まえて、未来への
思いを語った。

まず語られたのは、国際協力や社会課題に向き合う
中で見えてきた、自分の役割への思いだった。

「今日の参加者の皆さんのような、国際協力に参加す
る若い世代をもっと増やしたいです。国や背景が違って
も意見を交わし、一緒に問題に取り組める雰囲気をつく
ることが自分の役割だと感じています」(大久保さん)

「私は、教育におけるスポーツの幅を広げ、地球規模
で考えていくことに使命感を持っています。スポーツを
通して、地域の復興や青少年の成長に貢献していきたい
です」(原賀さん)

海外ルーツを持つ参加者からは、自身の背景を生か
した国際理解や文化発信への思いが語られた。

「私は、オンラインを活用して教育プログラムを配信し
たいです。もっと多くの人にマラウイを知ってもらい、逆
にマラウイの人たちにも世界を見てほしいと思っています
」(エマニュエラさん)

「日本とペルーという2つのバックグラウンドを生かし



て、異文化理解を深める活動をしたいです。日本やラテ
ンアメリカの文化を発信し、社会に貢献したいと思っ
ています」(アレクサンドラさん)

子どもや教育、表現活動を通して未来を支えたいとい
う思いも共有された。

「私は、セブ島の子どもたちが自立するための支援を
したいです。その一つとして、日本の小学生に描いても
らった夢の絵を絵本にして届け、子どもたちが未来を考
えるきっかけをつくりたいです」(山村さん)

「子どもや戦争の問題に向き合うために、将来は世界
で活躍できる女性になりたいです。そのためにも、英語
だけでなく他の言語も学び、より広い世界で課題に取り
組める力を身につけたいと思っています」(木ノ原さん)

「コーヒープロジェクトの活動をもっと多くの人に知
てもらいたいです。コーヒーの産地で暮らす子どもたち
の教育支援の必要性を伝えていくためにも、いつか自
分の目で現状を見たいと思っています」(馬場さん)

「私は幼い頃からピアノを習っていますが、東洋英和
に来てからは礼拝やクリスマス音楽会で演奏奉仕をす
る機会が増え、楽器を“誰かのために弾く”という視点を
教えられました。音楽が国際交流の架け橋になることも
多いので、ピアノと語学の両方を学び、たくさんの人た
ちとつながりたいです」(勝亦さん)

今回の座談会では、世界に向き合う中で生まれた気
づきや経験が、一人ひとりの未来を形づくっていること
が伝わってきた。東洋英和で育まれる他者への思いが、
それぞれの歩みを支える大きな力となっている。



ファシリテーター
河野 毅 教授

東洋英和女学院大学国際社会学部教授、同大学大学院国際協
力研究科長。インドネシア戦略国際問題研究所フェロー、在イ
ンドネシア日本国大使館専門調査員、政策研究大学院大学准
教授、在東ティモール日本国大使館一等書記官、国連開発計画
(UNDP)本部特別顧問、外務省総合外交政策局国連企画調整
課、同国際安全・治安対策協力室を経て現職。



※参加者の所属・学年・役職等は、座談会が開催された2026年2月時点のものです。

高校時代に体験した国際協力 今度は医師としての支援へ

瀬上 友見さん

「自由が丘ぶどうの木こどもクリニック」院長

小中高時代を東洋英和で過ごす。昭和大学（現・昭和医科大学）医学部卒業後、淀川キリスト教病院、昭和大学NICU等で勤務。米国・トライトンカレッジで栄養学を修得。2025年「自由が丘ぶどうの木こどもクリニック」を開院。認定NPO法人LIFEで栄養改善プロジェクトのアドバイザーを務める。2026年4月より、中高部校医。



スンバ島の子どもたちの発育状態などを診断し、現地の事情に沿って健康指導を行う

高校時代に飛び込んだ インドネシアでの植林キャンプ

瀬上さんが国際協力に関心をもったのは小学部時代。

「エチオピアの飢餓を取り上げた番組を見て、衝撃を受けました。ただその時は、いずれは困難な状況にある子どもを救う仕事をしたいと漠然と考えただけでした。その後、さまざまな悩みを抱えていた高校時代に、海外への憧れもあり、日本を離れて支援活動を体験しようと思ったのです」

瀬上さんは新聞記事で見つけたインドネシアのスンバ島で活動する認定NPO法人地球の友と歩む会／LIFE（以下LIFE）主催の植林キャンプに長期休暇を利用して2回参加する。

「そこは水道も電気もなく、水源地まで子どもたちが毎朝2～3時間かけて水汲みに行くような村でした。現地の人と一緒に同じ目標に向かって活動することにやりがいを感じ、再訪した時には水道管敷設も経験しました」

満身に栄養も摂れない子どもたちの現状を目の当たりにした瀬上さんは、「子どもを救いたい」という昔からの思いを、医師として実現させることを決意。

「ただ、医学部に進学してからは多忙になり、活動からは離れていました。再び活動を始めたのは、アメリカで栄養学を学んでからです。LIFEが新たにスタートさせた栄養



改善プロジェクトに誘われ、私は健診とそのデータ収集を担いましたが、そもそも衛生状態の悪さなど改善しなければならぬ問題が山積みであることを知り、継続した支援が続けられるよう今も奔走しています」

在学時には気づかなかった 礼拝のメッセージが今、支えに

この活動をきっかけに、高等部の国際支援団体TEAM（現TEAM+）に招かれ、LIFEの活動を英和生に伝える機会に恵まれた。

「国際協力には資金も必要だと伝え、クッキー販売の売上を寄付してくれました。LIFEでも資金集めのために古切手整理などのボランティアがあり、国内でも国際協力はできるので、身近な団体でぜひ体験してください」

在学中、東洋英和のキリスト教教育にはさほど興味を持てず、礼拝に対しても熱意を持つことはなかった。

「けれど医学部に進学し、病気で理不尽に苦しむ患者さんと向き合いつらかった時、救いになったのがキリスト教でした。教会に通うようになり、英和生だった時の礼拝のメッセージが心に残っていることを実感しました」

瀬上さんは、時を経て、「敬神奉仕」の精神と共に医師として地域で、そして海外で人を救う。

私の東洋英和時代



『赤毛のアン』でマッシュを演じる瀬上さん（左）

高等部で音楽部に所属し、ミュージカルを作っていました。舞台上で歌う人だけでなく、照明や衣装などを担当する仲間と一つの舞台を作り上げることが本当に楽しく、この時の仲間とは今もつながっています。



平和の理想と現実 その狭間で見つけた自分の役割

加納 穂乃さん

東洋英和女学院大学大学院 国際協力研究科2年

東洋英和女学院大学国際社会学部国際社会学科卒業。学部・修士5年一貫教育制度を利用して、東洋英和女学院大学大学院 国際協力研究科国際協力専攻修了。大学時代はコーヒープロジェクト、SDGs研究会、聖歌隊、オーケストラ部などに所属。

※所属・学年・役職等は、2026年2月の取材時のものです。



河野ゼミの海外研修で東ティモール最高峰のラメラウ山へ。励まし合いながら仲間とともに登頂

世界の複雑さに触れ 揺らいだ理想の平和観

高校時代に興味を持った国際哲学をきっかけに、国際社会学部に進んだ加納さん。講義だけでなく、コーヒープロジェクトやSDGs研究会などの社会活動にも取り組む中で、自分が想像していた世界の仕組みがいかに表面的だったかを痛感するようになった。

「1年次の国際関係論の授業で各国の安全保障政策を学んだとき、理想だけで世界は動かないと感じました。平和を願う気持ちは大切ですが、国が抱える現実には複雑で、そこには歴史や地政学、国益など、簡単に割り切れない要素が絡み合っています。現実の重さや理想との隔たりを知り、自分の平和観が強く揺さぶられました」

3年次の国際安全保障論の授業では、安全保障を自分事として捉えられるようになり、理解が深まっていった。そんな折、自衛隊広報官と話をすることが訪れる。

「遠い存在だと思っていた自衛隊が、災害派遣や国際協力など社会の安全を支える任務を担っていることを知り、印象が大きく変わりました。平和を守るという言葉が“理想”ではなく“具体的な行動”として迫ってきました」



研究と現場経験で見えてきた 必要とされる国際協力のあり方

東ティモールで行われたゼミ合宿も、自分の“当たり前”を問い直す視野の広がりをもたらした。

「インフラが整っていない環境で懸命に生きる人々の姿を見て、外からの価値観では測れない暮らしの尊さに気づかされました。国際協力は、支援する側・される側という単純な構図では語れないと実感し、本当に必要な助けを理解しようとする姿勢の大切さを知りました」

その後、学部・修士5年一貫教育制度を利用して大学院の国際協力研究科に進学。自分が表面的な平和観しか持てなかった背景には学校教育があると考え、日本の教育で重視されてきた「政治的中立性」が平和教育や政治教育に与える影響について研究を行った。

「平和維持のためには、現実を理解したうえで、自分がどう行動するかを考える必要があると感じました。学校教育では安全保障を扱いにくい部分もあるからこそ、自分が現場に立ちたいと思うようになり、陸上自衛隊への入隊を決意しました。訓練はこれからですが、自衛官として日本の平和と安全に貢献したいと考えています」

私の東洋英和時代



企業のご協力のもと青葉台東急スクエアでサステナブルコーヒーをお客さまに試飲していただきました。環境に配慮した農園の高品質な豆を使用した、大学のコーヒープロジェクトによるオリジナルドリップバッグです。

From the Garden of Kaede

楓の園から[学院NEWS]



希望をのせて



いざ行かん!



7:45だよ!全員集合



ひな祭り



ステンドグラス

小学部



静けさ

四季折々の 学び舎



イチョウの足あと



秋の彩り



夕暮れの小学部



世界平和のために、自分にできることを考える

小学部教諭 田中慧

2023年夏、私はフィリピンのストリートチルドレンや貧困地帯で生活する人々と交流するNPO法人のスタディツアーに参加しました。礼拝で「恵まれない方たちのために……」と祈っているにも拘らず、具体的にその人々のことをよく分かっていない自分の姿勢に少々問題意識を感じたからです。参加してみて得たものはとても大きく、「ストリートチルドレン」ではなく、「名前を知っている〇〇ちゃん」としてのつながりを感じられたことは何よりも大きな喜びでした。誰かを支援したり祈ったりするのであれば、その人たちの置かれている状況や求めているものを知ろうとすること、その「支援」は何のためにするのか支援者自身が自らに問いかける必要があることを強く感じました。



元JICA上級審議役
戸田隆夫さんの授業

翌年、私はJICAの主催する教師海外研修に参加することとなりました。その研修は、小中高の教員を開発途上国に数日間派遣し、その経験を踏まえて勤務校で国際協力に関する授業実践を行うという1年間のプログラムでした。私が派遣される予定だったバングラデシュはその年に政変が起きたため、残念ながら渡航はできませんでしたが、研修を踏まえて担任していた学年で、2年がかりの「小さいかご活動」の中で授業実践を行うこととなりました。

小学部の「小さいかご活動」とは、讃美歌Ⅱ 26番「小さなかごに」からインスピレーションを得た奉仕活動を学ぶ活動です。いわば、「敬神奉仕」にダイレクトに迫る活動ともいえます。小学部の子どもたちは、礼拝やこの小さいかご活動、聖書の授業などによってよく学び、身の回りから世界中まで、困っている人たちのことを覚えて祈ることが日常になっています。しかし、祈るだけで自分にできることといえば「募金」という発想しか出てこないことにちょっとした危機感を抱いていました。これは子どもたちだけではなく大人である私たちにとっても同じような傾向があると思います。

困っている人たちはどこにいるのか、そもそもその人たちは本当に困っているのか、私たちが募金をすることは一体なんの意味があるのか、そもそもその困り感は何によってもたらされているのか、私たちの困っている

人のイメージがあまりに単一的ではないだろうか、などのモヤモヤを子どもたちとも分かち合い、改めて自分には何ができるのかともに考えたいと思いました。



授業の内容としては、支援をした先に私たちが望んでい「小さいかご活動」授業風景る世界は一体何か(幸せなら貧しくてもいいのか、それとも幸せじゃなくても豊かならいいのか)、貧困とはどういう状態を示すのか、これまでに日本はどのようなアプローチをしてきたのか(JICAやNPOの働き)などについて、不定期に学び、学びのまとめとしてJICAのOBである特定非営利活動法人Forum2050代表の戸田隆夫さんによる出前授業(「平和を自分ごととしてとらえる」)を行いました。

最も印象深かったのは、子どもたち同士のモヤモヤを共有する授業でした。「なんで私たちが遠い国のことを学ぶ必要があるのか」「どうして世界は差別でいっぱいなのか」「私たちが募金をしても本当に届いているのか」「私たちにできることなんてないんじゃないのか」など。特に授業という場では、支援に肯定的な立場をとることが前提となっており、否定的な考えや感情は表に出しにくいのですが、そこに向き合うことはやはり必要だったのだと強く感じました。子どもたちは、そうしたモヤモヤを吐き出した上で、それでも世界が良い状態であるためには私たちそれぞれに何ができるのかを少しずつ考え出したように思えます。

6年生の児童の作文を引用して終えます。

「ストリートチルドレンや病気の人のことを自分たちがすぐに手を差しのべられるわけでもないのに、ただ『かわいそう』と言うのはいいことなのか、募金や私たちが行ってきた活動は本当に役立っているのか、恵まれない人々のためにできることは少ないのではないのか、そもそも貧富の差はなぜ生まれるのだろうか。しかし、貧しいから不幸だとは限らない。幸せの価値観はみんな違うし、自分が幸せと思えば、その生き方が自分にとっての正解のかたちだと思う。みんなでいろいろな考えをシェアして、答えが見つかったわけではないけれど、これからも疑問に思うことに対して、考えを深めたいと思った」

つながる、ということ

東洋英和幼稚園 担任 山本 由梨

幼稚園には、むかしから大切に守られてきたいちょうの木があります。毎年秋になると実を落とし、その恵みはぎんなん献金として、必要とされる場所へ届けられてきました。この木のもとで受け継がれてきたのは、献金という行為そのものだけでなく、「自分たちがいただいている恵みを、次へとつないでいく」という思いです。その思いは、今も幼稚園の暮らしの中に静かに息づいています。



つないできた木のもとで

年長組では、このぎんなん献金に向き合う中で、子どもたちと「自分たちにできることは何があるだろう?」と考える時間を持ちました。話し合いの中では、「お金を送る以外にも、できることがあるかもしれない」「お祈りすることもできるね」という声があがり、子どもたちは“心を向けること”の大切さに気づいていきました。そこから、自分たちの手でもできることはないかと考え、身近なところから行動をしていくことになりました。

子どもたちは、バングラデシュで暮らす人々の生活を支える活動のひとつであるフクチャリ(家庭で不要になった衣服を集め、必要な国へ届けるACEF:アジアキリスト教教育基金の取り組み)があることを知り、まず家にあるもう着なくなった洋服を寄付することにしました。「これ私のお気に入りの洋服なの。バングラデシュの子ども

たち、着てくれるかな」「喜んでくれたら嬉しいね」と話しながら洋服を集める中で、自分の暮らしと遠い国の生活が、ほんの少しつながったように感じられる経験となりました。洋服を送るという行動を通して、子どもたちはACEFの働きについても知っていきました。祈り、考え、行動する——その一つひとつが重なり、自分たちの思いが、「誰かのもとへ届く」という実感を伴ったものへと変わっていったように感じられます。その後、今年の献金先をどこにするかを考える中で、子どもたちの心を引きつけたのが、バングラデシュの学校でさつまいもを育てる人たちのことでした。今秋、幼稚園の畑でもさつまいもを植え、育て、収穫し、蒸してみんなで味わったところだったからです。後日、同じ作物が育てられていることを知り、「同じだったね」「私たちも食べたね」と声があがりました。自分たちの体験と重なったことで、更にバングラデシュの人たちが身近な存在となり、「ここに献金を届けたい」という気持ちが自然とまとまっていきました。こうして今年の献金先は、ACEFを通じてバングラデシュの学校菜園のためにと、子どもたちの話し合いによって決まりました。

いちょうの木を通して長い年月をかけてつないできた願いは、今年もまた、子どもたちの小さな手とあたたかな心に受け継がれています。お金だけでなく、祈りや行動を通して誰かを思い、自分たちにできることを考え続けること。その経験が、子どもたちの中に根を張り、これからの歩みを支えていくことを願っています。



みんなで味わったさつまいも

もう一人の友だち

かえで幼稚園 年中組 担任 飯島 有佳

かえで幼稚園では、1989年から2007年までCCWA（社会福祉法人基督教児童福祉会）の国際精神里親運動部を通してフィリピンの子どもを「もう一人の友だち」として支援してきました。2008年からはケニアにあるコイノニアアカデミー（現コイノニア教育センター）を通して、子どもを支援しています。現在はコイノニア教育センターに通うグレース・ンジョギちゃんという6歳の女の子を「もう一人の友だち」として覚えています。

年長組の子どもたちはグレースちゃんのことを思ってお祈りをし、誕生月の子どもたちが毎月近くの郵便局に行って、献金を送っています。その献金は、アドベントの期間に年長組の子どもたちがグレースちゃんのことを覚えてクッキーを作り、在園児の保護者の方を買っていただいたものです。子どもたちはクッキーを作りながら、「グレースちゃんはどうな子どもなんだろう?」「どんなことが好きかな?」と嬉しそうに話していました。また、保護者の方にクッキーを買っていただいた時には「グレースちゃんはこのお金でどんなものを買うのかな?」「このお金でどんなことができるかな?」とグレースちゃんに心を寄せている姿がありました。子どもたちがグレースちゃんのために、手と心を動かしてクッキーを作り、お店やさんをすることは、聖書に書かれている「隣人を自分のように愛しなさい」（マルコによる福音書12章31節）というみ言葉につながっています。クリスマスには、グレースちゃんからクリスマスカードが届きました。子どもたちにグレース

ちゃんから届いたカードを読むと、嬉しそうな表情で聞いていました。「もう一人の友だち」とつながって、祈り合っていることを確かに感じるができるひと時でした。

また、年に一度、コイノニアバザーを行っています。このバザーではコイノニア教育センターの保護者の方がケニアの伝統的な布、カンガやキコイで子ども服やエコバック、ポーチなどを作ったものを販売しています。バザーの売り上げはすべてコイノニアの働きのために送金しています。コイノニアバザーを通して保護者の方もコイノニア教育センターの働きが守られるように、祈りを合わせる時が与えられています。

在園している子どもや保護者だけでなく、卒業した子どもたちも共にコイノニア教育センターに通う子どもたちのことを覚えてお祈りをしています。卒業生は卒業してからもイースター礼拝とクリスマス礼拝の時にかえで幼稚園に帰ってきて共に礼拝をまもります。小学生、中学生や高校生の子どもたちが幼稚園に帰ってきて久しぶりに友だちや先生と会い、共に讃美歌を歌います。礼拝の中ではコイノニア教育センターの子どもたちのために献金をおさげします。

かえで幼稚園では、グレースちゃんやコイノニア教育センターを通して、イエスさまが教えてくださっている愛のわざを実践する喜びを与えられています。



クッキーを作っている年長組の子どもたち



保護者の方にクッキーを買っていただいているところ



新リュックの誕生

生徒会担当 数学科 平石 真紀

2025年度、中高部生徒会では、これまで生徒からの要望の声が多数あった学校指定の新しいリュックの作成に取り組みました。



菅公さんのショールームにて

4月に、リュックの製作を担当して下さる東京菅公学生服株式会社(以降菅公さんと表記)のショールームにお邪魔して、リュックに使われている布やファスナーなどの素材を拝見して

その特徴をお聞きしたり、菅公さんが今までに手掛けてきた他校のリュックの現物を拝見してポイントを教えていただいたりしました。それを元に1回目の全校アンケートをとりました。

色、形、肩紐、質感、サイドに入れたいものを選択形式で尋ねる他、優先したい事項も選択形式で第3位まで尋ねるなど、生徒会はよく工夫して細かく生徒の要望を拾っていました。生徒の関心度も高く回答率は6割を超えました。

連休明けの5月、1回目のアンケートを元に試作品3作品の案を考えました。アンケートで大多数が要望したものは3作品に共通して取り入れ、アンケートで意見が対立したものは、3作品に分けて取り入れました。例えば、質感などは意見が「ざらざら」と「つるつる」で分かれたので、1つをポリエステル素材、1つをナイロン素材にしました。これに加えて、サイズやポケット、ファスナーの位置なども細かく自分たちで考えました。こうして、6月末にリュックの試作品3作品が仕上がりました。



サイズやポケット、ファスナーの位置を工夫。できた試作品3種

次に試作品3作品のうち、どれがよいかのアンケートをとるために、全校生徒に試作品の周知をしました。具体的にはGoogle Classroomに3作品の特徴をアピールしたPR動画を載せ、終礼でも流してもらい、生徒会報や生徒会のイベントでもPRコーナーを設けました。そのうえで、7月から9月にさらにアンケートを重ね、最終案が決定しました。

完成品は楓祭でお披露目されました。今後多くの生徒に愛されるものになればと願っております。



完成した新リュック

生徒会長の宮澤さんに感想を聞きました

Q1 リュックを作成するにあたって、苦労したところはどこですか？

最も苦労した点は、全校生徒の多様な意見を一つの形にまとめていくことでした。アンケートを重ねる中で、「軽さを重視したい」「収納力をもっと増やしてほしい」「デザインはシンプルがいい」「かわいさもほしい」など、意見はさまざまで、時には相反する要望も多くありました。それらをすべて叶えようとすると、別の課題が生まれてしまうこともあり、何を優先すべきか、生徒会役員内でも何度も話し合いを重ねました。また、アンケートの結果をそのまま反映させるだけでなく、「本当に毎日使うリュックとして最適か」「長く愛されるデザインになっているか」という視点で考えることも難しさの一つでした。実現可能性や耐久性、コスト面とのバランスを取る必要もありました。そのため、菅公さんや先生方と、細かい部分まで何度も調整を行いました。意見が分かれたときこそ「生徒が主役の生徒会」という理念に立ち返り、生徒にとって何が一番良いかを考え続けたことで、妥協せずに前に進むことができました。この過程は決して簡単ではありませんでしたが、多くの人と対話を重ねながら一つの形を作り上げていくことの大切さを、強く実感する経験となりました。

Q2 実際にでき上がってみてどうでしたか？

率直に「本当に形になったんだ」という達成感と安心感が得られました。アンケートや話し合いを重ねてきた「軽さ」「収納力」「デザイン」という生徒の声が、机上の意見ではなく、実際に使える形として反映されていることを実感しました。また、半年を超える長い期間お世話になり、「全校生徒がわくわくするリュックを作る」と言ってくださった言葉通りに、一切の妥協なく素敵なリュックを作ってくださった菅公さんをはじめ、携わってくださった多くの方々の想いが形になった宝物のように感じ、強く感動しました。毎日使うリュックだからこそ、多くの人の思いが詰まったこのリュックが、これから東洋英和での毎日の学校生活の一部として生徒に寄り添っていくことを、とても誇らしく思います。また、このような貴重な経験をさせていただいたことに心から感謝しています。

国際関係研究所 2025 年度シンポジウム 「翻訳と文化の変容」の開催報告

人間社会学部国際学科 専任講師 金子 真奈美

2025年11月29日(土)に、六本木校地の本部・大学院棟において東洋英和女学院大学国際関係研究所主催、本学大学院国際協力研究科および港区麻布地区総合支所共催のシンポジウム「翻訳と文化の変容」を開催し、大勢の方にご来場いただきました。

ご登壇いただいたのは、長年第一線で活躍してこられた3名の翻訳家、金原瑞人氏、三辺律子氏と、越前敏弥氏です。翻訳とは、単なる言語の置き換えにとどまらず、複数の文化を媒介する営みでもあります。そして、そのプロセスには常に葛藤が伴います。当日は、このプロセスに深く携わってこられた翻訳家の先生方に、翻訳の現場で生じる葛藤と、そこから生まれる文化的変容についてお話いただきました。

最初にご発表くださった金原氏は、幕末にジェームズ・カーティス・ヘボンが編纂した『和英語林集成』を軸に、日本語における左横書きの誕生と表記の変遷について解説してくださいました。貴重な資料を回覧しながら、日本語の横書きが定着するまでの試行錯誤や、ローマ字表記の揺れに焦点を当て、異文化(=横書きの言語)との衝突が、新しい表記法を生み出し、日本語の可能性を広げたことの歴史的意義をお示くださいました。



金原 瑞人 氏

次にご発表くださった三辺氏は、YA(ヤングアダルト)文学の翻訳を通じて、新しい概念や言葉が日本の社会に定着していく過程について解説してくださいました。「LGBTQ」「フェミニズム」「ブラック・ライヴズ・マター」をキーワードに、関連する用語の訳語の変遷や、訳本が出版されるタイミングについての分析を交えながら、新しい価値観や多様性の概念を日本に根づかせるうえでYA翻訳文学の負う役割を浮き彫りにしてくださいました。



三辺 律子 氏

続いて、越前氏は翻訳における「和臭」(日本語特有の表現が醸し出す違和感)を出発点とし、「異化」(原語の論理や習慣に近づけた訳文を目指すこと)と「同化」(読者の論理や習慣に近づけた訳文を目指すこと)という翻訳学の概念を用いながら、「和臭」がそのふたつの概念のどこに位置するか、また、翻訳とは「異化」と「同化」の間で、常に最適なバランスを探り続ける繊細な作業であることを示してくださいました。



越前 敏弥 氏

各氏の発表後には会場との質疑応答も活発に行われ、刺激に富んだ90分となりました。機械翻訳の精度が飛躍的に向上し、翻訳の即時性に注目が集まりがちである今日において、言語が国境を超える際のインパクトについて、立ち止まって多角的に考える大変貴重な機会となりました。

シンポジウムの終了時に、本部・大学院棟の1階で行われていた翻訳家村岡花子氏と歌人片山廣子氏の交流をテーマとした本学院ならではの展示についてご案内し、会場の皆様にお立ち寄りいただきました。ご来場者に、ことばについて幅広い視点から思索する時間を東洋英和で過ごしていただければ幸せに存じます。

アジアキリスト教教育基金(ACEF)を 国際支援の学びの窓として

中高部副部長 野村 正宣



2025年夏のバングラデシュスタディツアー集合写真

学校支援の起こり

生徒たちによるACEFを通じたバングラデシュの学校支援は英和の創立125周年の2009年に始まった。それまで周年記念の時には記念グッズを作って全校生徒に配ってお祝いをするのをもっぱらにしていたが、当時の生徒会長および高等部長佐藤順子先生が「125年前にカナダからの支援を得て英和が創立したことを深く覚えて、今度は世界に目を向けて今学びの支援を必要としているところに自分たちが支援することをもって周年記念としたらどうか」との発案が表明された。まさに「恩送り」の発想である。当時、ACEFが現地NGOのBDP (Basic Development Partners)を通して支援している寺子屋学校は藁ぶき屋根の簡素な建物から頑丈なレンガ造りの学校への建て替えが求められていたので、それに応えるべく100万円の指定寄付がなされた。それで建て直されたのがネトロコナ県ベタティ村ジェレパラBDP小学校である。建て替え前の2010年夏と建て替え後の2011年夏に本校生徒がスタディツアー（以下ST）に参加しており、二人の感想がbefore&afterとしてACEFの機関紙『ACEF COMMUNICATION』42号に特集されている。本校のバングラデシュST参加の特徴として、生徒会（特に高等部中央委員会）が生徒派遣に関わり参加費の補助も出している点が挙げら



子どもたちは学校が大好き

れる。夏休み明け9月の礼拝ではSTの報告として話してもらい、11月の創立記念日近くではワンコイン献金を高等部中央委員会が生徒全体に呼び掛けてACEFに届けており、本校生徒会はACEFの団体会員となっている。こうした持続的な支援とST参加を通じた国際支援の学びをし続けて16年になる。

16年間続けてきて

STは治安・政情の不安による3年間の中止やコロナ禍による3年間の中止などを挟みつつも、これまで延べ34人の生徒やOG、教師が参加してきた。2025年度も高2の3名とOG2名がSTに参加した。途中から2チームに分かれてバングラデシュの農村地域を訪問したが、高2の1名とOG2名の方のチームはジェレパラBDP小学校が前年の巨大サイクロンによる被害で屋根や壁が一部損壊して雨漏りが日常化し床も水浸しの中で104名の子どもたちが学んでいる現状を目撃する。帰国後、そのチームのメンバーとACEFユースの学生たちがジェレパラBDP小学校を再建するべく目標100万円のクラウドファンディング(CF)を立ち上げ、広く支援を呼びかけた。高等部中央委員会でも2011年に英和の指定寄付によって建てた学校だけにこのCFを応援しようということになり、ACEFによるCFチラシの裏面に独自の保護者向けチラシの面を作成して両面印刷にして全校1150名の生徒を通じて保護者への協力を呼びかけた。CFの期限の1月末までに1,505,805円が集まり見事に目標が達成された。開発途上国の現状を知り私たちに何ができるかを考えるSTは、高校レベルの学校単独では企画実施すること



左: ACEFのクラウドファンディングチラシ



右: 高等部中央委員会が作成して添えた応援チラシ

は不可能である。現地との関係構築や知見、経験に乏しいからである。それ故に開発途上国へのSTを実施している国際協力NGOとの連携、利用は貴重である。とりわけキリスト教の看板を降ろさず掲げ続けているACEFのビジョン、ミッションは、キリスト教学校である東洋英和との親和性は高いものと思う。生徒たちにはいろんな学びや経験の選択肢を提示したいが、学校主催で全て提示できるわけではない。なればこそ、国際支援の学びの窓を開いてみたいと志す生徒たちには、今後もACEFのSTは貴重な学びの契機を与えてくれるものと思う。

高校時代に途上国に出かける意味

高校在学中に途上国にSTで出かけた経験を持つOG姉妹の本間(森田)智子さんと森田結子さんに、その経験が今の自分にどのようにつながっているのかを聞いてみた。現在、智子さんは産婦人科医として働き、結子さんは助産師として働いておられる。智子さんは2014年夏のSTに参加、結子さんはACEFとは別のSTでミャンマーやスリランカに行った経験を持つ。お二人とも大学での学びや今の仕事への起点となり、現在の支援的な仕事への関心の火をつけた着火点になっているのは途上国へのSTだったと語る。なぜそうなったんだと思うかと問うと、途上国の現状を垣間見ることは学校中心の高校生にとってはある意味非日常であり、その経験は自分と向き合い、自分がこの先どのような道を進もうかということの着想を得させたのではないかと話す。そしてSTを起点とした今の仕事をする自分は、何かの時にはいつで

も自分にできる手助けはするというマインドセットに結びついているとのこと。智子さんは医者として、結子さんは助産師・看護師として共に人のために尽くしていく生き方が窺われた。高校生にとってSTの経験は飽くまでもオプションの部分ではあるが、お二人の話を伺うと「敬神奉仕」マインドを植え付けて卒業した先の今の姿に大きく寄与していることがわかる。



話を伺った本間智子さん(中央)森田結子さん(右)姉妹と筆者

今も続く宿題の思い

私がACEFのSTに参加したのは2000年夏で英和に勤めて1年経った年だった。国際支援の専門家になるわけでもなく、その後再び訪れることもなく現在に至る。しかし一方で、それ以来ACEFの国内での活動にコミットし続け理事を引き受け続けている。なぜか?と自問すれば、やはり一度きりのST参加であってもそれがその後のマインドセットの着火点になったからと言えるだろう。どのようなマインドセットか?それは、「自分の本業は日本の学校教育下の東洋英和の生徒たちの教員であるけれども、世界には英和のように望めば毎日学校に通える状況にはない国の子どもたちもいる、その子どもたちのことを覚えて日本で教員の仕事を全うしよう」というものだ。そこにある大きな差を少しでも縮める宿題のような思いもある。経験というものはその後の関わりがなければ時とともに色褪せてやがて単なる「思い出」に墮することもあるが、その経験が一度きりであっても、関わり続けることによってマインドセットに仕上がっていくこともあるのだろう。ST参加者には後者になることをいつも願っている。

丹羽輝子先生について

ジャマルプール県ジャマルプール地区にある丹羽輝子メモリアル教師研修センター内には故丹羽輝子先生の写真と記念プレートが掲げられています。丹羽先生は東洋英和幼稚園元園長で、1990年のACEF創設時の理事メンバーとして長らくACEFの活動を支えられました。子どもたちの目の輝きには何ら隔てのないことを優しい眼差しで見据えておられたのだと思います。私財を投じて教師研修センターを現地に贈り、パングラデシュでの教育の浸透と充実をいつも願っておられました。



何事にも時があり、天の下
の出来事にはすべて定められた時がある。
(コヘレトの言葉3-1)

教員紹介

「優しさ」からさらに先へ
多文化共生社会を目指すため

Naoko Yamamoto

大学

東洋英和女学院大学 人間社会学部 国際学科

山本 直子 准教授

慶應義塾大学大学院博士課程社会学研究科、単位取得退学。博士（社会学）。大学在学中から、外国人集住地域での日本語教育支援や学習支援のボランティア活動を行ってきた。大学院では移民政策や多文化共生政策について、フィールド調査による研究を展開。



3人の娘たちのリクエストに応じて一緒に小物作りをする手芸の時間は、忙しい日々の中で心を整えてくれる大切なひとときです

学生からのメッセージ



国際社会学部 国際社会学科4年
白濱 有莉佳

山本ゼミでは、多文化共生をテーマに、在日外国人の背景や社会課題について調査・研究を行い、ディスカッションや発表を通して理解を深めています。山本先生は、発表に必要な基礎から多角的な視点まで丁寧に指導してくださり、学生一人ひとりの意見を尊重してくださる、親しみやすい優しい先生です。安心して学べる環境を整えてくださいます。

—研究内容と大学での教育について教えてください。

社会学という専門領域で主に移民について研究しています。日本には外国籍の人が約370万人いて、その子ども世代には外国籍だけでなく、日本国籍の人もいます。いろいろな文化を持って日本社会で生きていますが、よい教育を受けて充実した人生を送っている人もいれば、あまり順調でない人もいます。その原因を調査すると、差別を受けたり、日本語の習得がうまくいかなかったり、家庭と学校とで使う言語が違うことでさまざまなトラブルがあったり、そこに起因して進学など社会につながる道が失われてきた事実が見えてきました。外国にルーツのある人も、自分たちの社会のメンバーなのだと思える視点が、日本社会に乏しいのです。最終的には、どこで生まれ育っても同じチャンスがあり、不利にならない社会の実現を目指していますが、まだまだ遠い道のりです。大学ではこれら原因を探りながら、自分とは違う立場の人たちに目を向けることができる学生を育てたいと思っています。

—この研究を始めたきっかけと教員になるまでの経緯を教えてください。

以前、地方の市役所に勤務していました。外国人の多い自治体で、さまざまなトラブルがありました。日本人社会と外国人社会が分断されているように見えるのはなぜなのか。その疑問を解決するため、大学院に進学しました。在学中はちょうど子育てと重なる時期で、子連れで調査をすることもありました。そんな時、助けてくれたのが外国人集住地のお母さんたちです。食事を作ってくれたり、子どもと遊んでくれたり。国を超えた母親同士の連帯の中で研究を続け、今に至ります。

—学生にはどのような思いを持って指導されていますか？

学部の特性でもありますが、「人のために何かをしたい」という学生が多いと感じています。皆さん、やさしいですね。ただ、ゼミで議論をしていて「外国人も社会の一員だから思いやりをもって受け入れよう」と発言するのは簡単ですが、その優しさが表面的な着地点にとどまらないように学びを深めていけたらいいと思っています。そのためにも、「深く考える力」を養えるような指導に努めています。

—英和生にメッセージをお願いします。

自分とは違う意見を持っている人、弱い立場にある人、反対の立場にいる人、そんな人たちがいた時、いったん立ち止まって相手の立場になってみてください。そして、今も持っている「人のために」という気持ちを、卒業しても持ち続けてほしいと思います。

自分で考えることを促し
高い問題解決能力を育む



Yoshihisa Sasaki

小学部

佐々木 喜久 教諭

明星大学経済学部に進学後、教育学部に転部。1986年4月より東洋英和女学院小学部に着任。6代にわたる小学部長のもとで教鞭をとりながら、教務、入学委員、宗教部などで活動。在職中に2回、校舎の引っ越しを経験。趣味は家族と食べ歩き。



西武鉄道が運行する52席限定で極上の料理と美しい風景を楽しめる、旅するレストラン「52席の至福」。その車内で、提供されたコース料理の一皿

同僚からのメッセージ



東洋英和幼稚園長
岡田 光弘

佐々木喜久先生は、私が小学部に奉職したときに一番年の近い男性の先生でした。先生はどんなに忙しい時でも、私の悩みを真剣に聞いてくださり、適確なアドバイスをくださいました。先生は、誰も気がつかないことに素早く反応し、適切に対応されています。正に「縁の下力持ち」という表現がぴったりな優しい先生です。

—小学校教諭を目指したのはなぜですか？

子どもの頃、父が転勤族で各地を転々とし、6年生の時に入学時の東京の小学校に戻るようになりました。ところが、教科書をはじめ何から何までそれまでの地域と違い、戸惑いました。そんな時に親身になってくださったのが、担任の先生でした。「先生って素敵な仕事だな」と、その時から小学校教諭を目指すようになったのです。幼稚園の頃から教会に通っていて、成長するにつれて年下の子どもたちと接する機会が増え、子ども好きだったことも小学校にこだわった理由の一つです。

—東洋英和には新卒で着任されたそうですね。

小学部初の新卒男性教諭で、心配される方も多かったですね。特に生徒は警戒したようです。教会に通っていたものの、キリスト教教育を行う学校の慣例行事を知らずにスタートしたため、生徒からすると「そんなことも知らないの?」という感じだったのです。それでも、強い思いで就いた教職なので、全身でぶつかっていきこうと覚悟を決めて臨みました。

—担任以外に宗教行事を担当されているそうですね。

クリスマス礼拝の中で、聖劇を担当しています。イエス様の誕生を心から祝いましょうと、子どもたちが準備を進めるのを見守ります。当日は、一人ひとりの子どもたちが思いを込めて歌い、一生懸命に演じてくれます。その気持ちが、神さまや劇を見てくださる方にも届いていくのを感じ、みんなで一つになる瞬間が本当に感動的でやりがいを感じます。

—英和生についてどう思われますか？

相手の立場に寄り添う気持ちが強く、私の体調が悪い時など「先生、大丈夫?」などと声をかけてくれます。元気になると喜んでくれますし、そういう声掛けが自然とできる英和生を誇りに思います。

—指導する上で心がけていることはありますか？

教師は大人の正論で語りがちですが、子どもたちには子どもたちの考えがあり、正論が通じないこともあります。そんな時、否定したり、「こうしなさい」と命令したりせず、「じゃあ、どうしたらいいと思う?」と問いかけるようにしています。すると、自分たちで一生懸命考えて、自ら問題を解決するよう行動してくれるんですね。英和生は、総じて問題解決能力が高いと感じます。

—英和生にメッセージをお願いします。

やはり人の痛みがわかる優しい人になってほしいと願っています。社会に個人主義が広がる中でも、人と人とのつながりは大切です。しかし、ただつながるだけでなく、その人に寄り添ってあげられる包容力を身につけた大人になってほしいと願っています。

違いを抱えたまま向き合う

イスラエル・ヨルダン川西岸地区、マサーフェル・ヤッタ。乾いた風が吹く荒涼とした丘を越えていくと、潰れた家や焼け焦げた車が目に入ってきます。

「全部、入植者たちの仕事さ」

パレスチナ人の運転手があきらめたような声で言いました。

「この車だって、緑のナンバープレートだったら、検問で2、3時間はかかる」

イスラエルは黄色、パレスチナは緑。通れるルートが違います。プレートの色がどちらの「世界」に属しているか、無言で語っているようでした。

1967年以降、イスラエルはヨルダン川西岸地区を軍事占領し、国際法違反とされながらも、入植地の建設を進めてきました。最前線の村で、私は夫を殺されたパレスチナ人女性の家を訪れました。つつましい最低限の暮らし。そのすぐ向こうに、入植者たちの真新しい家が並んでいます。入植者たちは、彼らの家や、水道や電気などのライフラインを破壊し、家畜を奪っていきました。その様子を携帯電話で記録していた彼女の夫は、入植者が発砲した銃弾を受けて命を落としました。

「絶対に許しません。夫に何が起きたのか、子どもたちに伝えていきます」

そう語る彼女の暗い目を見たとき、強い既視感にとられました。2年前、イスラム組織ハマスの襲撃を受けたイスラエル南部の集落で、家族を殺されたイスラエル人の女性が、妊娠6ヶ月のお腹をさすりながら語った言葉と重なったのです。

「決して許さない。この子にも必ず伝えます」

民族も立場も違う2人が発した同じ言葉。暴力は憎し

みの記憶を刻み、次の世代へと手渡されていきます。

ガザ地区では、すでに7万人超が亡くなり、およそ200万人が家を追われました。私たちはなぜ、この戦いを止めることができ



なかったのか……マサーフェル・ヤッタの子どもたちを思うたび、その問いが胸に突き刺さります。

一方、同じイスラエルの地に「平和のオアシス村」があります。ユダヤ人とパレスチナ人が共に暮らし、学校ではヘブライ語とアラビア語の両方で教えています。互いの文化を学び合い、次の世代に暴力の連鎖を渡さないための、静かで粘り強い実践です。

そこで出会ったパレスチナ人の女性が赤ちゃんを抱きながら言いました。

「この子にも、将来この村に住んでほしい」。その言葉に答えるように、赤ちゃんが「まーま」と声を上げ、女性とはびきりの笑顔になりました。その時、感じたのです。恐怖や憎しみが受け継がれる現実の中で、私たちが失ってはいけないものが確かにここにある、と。

日本は戦場から遠く、爆撃や銃声を耳にすることはありません。けれど「関係がない」わけではないのです。無関心でいること、見えていても目をそらすことは、結果として、暴力が続く世界を支える側に立つことでもあります。

オアシス村の人々がしているのは、違いを消すことではなく、「違いを抱えたまま向き合うこと」です。恐怖や憎しみを次の世代に引き継がない、と意識的に決断し続けることです。相手の言葉を学ぶことは、相手の存在を認めること。それは小さくても、暴力の連鎖を断ち切るための確かな一歩です。

国際協力や共生とは、遠い国で何かを「してあげる」ことではなく、まず知ろうとすること、誰かの痛みを無関係な出来事として片づけないこと、「傍観しない」という姿勢なのだと思います。

耳をすませ、そばにいる——その小さな積み重ねこそが、未来をわずかでも違う方向へつなぐ直す力になると、私は信じています。

Profile 鈴木 あづさ

幼稚園より高等部まで東洋英和で育まれ、早稲田大学第一文学部、オレゴン大学ジャーナリズム学部卒業。ケンブリッジ大学客員研究員。日本テレビで社会部デスク、中国特派員、読売新聞編集委員、討論番組キャスター、ロンドン支局長等を歴任。現在多摩大学大学院教授。水野梓のペンネームで『蝶の眠る場所』『彼女たちのいる風景』『グレイの森』等5冊の著書がある。



平和のオアシス村の少女たちと



武蔵小杉のホテル・レストラン
祝賀会・同窓会・総会

ホテル精養軒

萩原ひとみ(1973年高等部卒)

住所 神奈川県川崎市中原区小杉町 3-10

TEL 044-711-8855

URL <https://www.seiyoken.com>



Check! 武蔵小杉駅から徒歩3分、創業78年のホテル。着席240名立食300名の「飛翔」他大中小個室会場と、レストラン(和&洋)が評判です。同窓会や祝賀会等にぜひご利用ください。空と星を望むスカイビュールームも人気です。



一般診療以外に育児相談や
心の相談ができる小児科

自由が丘ぶどうの木こどもクリニック

瀬上 友見(旧姓永谷 1997年高等部卒)

住所 東京都世田谷区奥沢 6-31-1 2F

TEL 03-3703-1212

URL <https://www.budonoki-kodomo.jp/>



Check! お子さま一人ひとりの健やかな成長を見守るだけでなく、日々の子育てに向き合う親御さんの心にも寄り添いたいと思っています。お子さまが安心して通院でき、親御さんがほっとできる温かなクリニックを目指しています。

※P.07で瀬上さんのインタビューを掲載中です



Enjoy Eating the Veggie Way!

SASAYA CAFE

篠原 寿子(旧姓鈴木 1989年高等部卒)

住所 東京都墨田区横川 1-1-10

TEL 03-3623-6341

URL <https://www.sasayacafe.com>



Check! 劇場とギャラリーを併設し、できるだけオーガニックの食材を使った食事とお菓子を誰でも気軽に楽しめる、心と体に優しいヴィーガンカフェです。



本格江戸前寿司が食べられるお店

三宿の寿司 えん

野津 萌(旧姓山下 2019年大学卒)

住所 東京都世田谷区池尻 3-30-6 中尾ビル1F

TEL 03-6450-7118

Instagram [mishukunosushi_en/](https://www.instagram.com/mishukunosushi_en/)



Check! 寿司屋は今コースが主流ですが、アラカルトで好きなものを一貫から頼むことができるお店です。どんなに品数が多くても、昔ながらの仕事を手間暇かけて行うようスタッフ皆で徹底しています。

東洋英和楓の会主催

世界を動かす「表現」の力——卒業生・鈴木あづさ×河瀬直美 夢の対談

東洋英和が生んだ多彩な才能、鈴木あづささん(作家・水野梓)が帰ってきます! 世界を舞台に活躍する彼女の原点とは? さらに今回は、鈴木さんと親交のある映画作家・河瀬直美さんを特別ゲストにお迎えします。

第一線で走り続けるお二人の「言葉」が、私たちの日常に新しい光を灯してくれるはずです。この日、この場所でしか生まれない奇跡のトークセッションに、ぜひお立ち会いください。

■第一部 講演(鈴木あづさ)

「世界の現場で見た、人間の強さ」

ロンドン支局長として戦争や社会の激動を取材してきた経験と、作家としての歩みをもとに、極限の状況の中でも失われない日常の尊さと、人が生き抜く力について語ります。



鈴木あづささん
(作家名:水野梓)

P.21のプロフィール参照



©LESUE KEE

河瀬 直美さん

生まれ育った奈良を拠点に映画を創り続ける映画作家。一貫した「リアリティ」を追求した作品は、カンヌ映画祭をはじめ世界各国の映画祭で受賞多数。また自身で立ち上げた「なら国際映画祭」では後進の育成にも力を注ぐ。ユネスコ親善大使他、俳優、DJ、エッセイ執筆など、ジャンルに拘らず活動中。

■第二部 トークセッション(鈴木あづさ×河瀬直美)

「現実を見つめ、未来を語る女性のまなざし」

映画作家の河瀬直美さんを迎え、報道・映画・文学という表現を通して現実をどう見つめ、そこからどのように未来を描いていくのかを語り合います。変化の時代を生きる女性の視点から、これからの社会の可能性を考えます。

日時: 2026年11月23日(月・祝)
開演: 13時30分(開場13時00分)~15時30分(予定)
会場: 東洋英和女学院中高部
新マーガレット・クレイグ記念講堂
申込方法: 7月1日(水)より申し込み開始
右のQRコードよりお申込みください。
問合せ先: kaedenokai@toyoeiwa.ac.jp



「花のいのちはみじかくて…」意外？な 二人の心の交流

— 展示コーナー企画展「林芙美子と村岡花子」のご案内 —

本部・大学院棟の村岡花子文庫展示コーナーでは企画展「林芙美子と村岡花子—文学ジャンルを越えて結ばれた交流—」が開かれています(2026年11月30日まで)。

林芙美子の代表作といえば『放浪記』。舞台化もされ、今は亡き大女優の森光子さんが上演2000回を達成するなど、近年まで広く親しまれてきました。『放浪記』の主人公は、貧乏のどん底をたくましく生き抜く女性です。1930(昭和5)年の発表当時、飾らない表現が賛否両論を巻き起こし、芙美子は人気作家へと登り詰めていきます。

同じ頃、芙美子より10歳年上の村岡花子は英米文学の翻訳や少女向け雑誌での執筆で有名でした。芙美子と花子の属する文学サークル、文学ジャンルはだいぶかけ離れていましたが、二人の間には親しい心の交流がありました。

村岡家には芙美子による「花のいのちはみじかくて…」

の詩の原稿がありました。花子はこれを座右の詩として、いつも書斎の見えるところに掛けていたそうです。

花子の没後、ご家族が研究者に尋ねたところ、芙美子はしばしば「花のいのちは…」の言葉を色紙などに書いていましたが、芙美子の作品中にこの詩はなく、花子に贈られた詩稿こそが、原典であるかもしれないと判明しました。

その貴重な詩稿は現在、東洋英和に寄贈され、今回の企画展で公開しております。この機会に是非ご覧ください。

林芙美子(前列左から2人目)、村岡花子(後列左)と女流文学者たち(1943年)



- 「史料室だより」No.106では、閉山した筑豊の炭鉱町で、1970年代に無認可保育所「しおんえん」を開園した東洋英和女学院短期大学保育科卒業生たちの活動の特集します。以下のURLもしくは右のQRコードからお読みいただけます。
- 法人事務局広報史料室 TEL:03-3583-3166/FAX:03-3583-3329 ホームページ <https://www.toyoeiwa.ac.jp>



後援会より

2026年度後援会総会のご案内

2026年度後援会総会を以下のとおり開催いたします。

当日は、総会、学院各部説明会に引き続き、学院各部責任者や教職員にもご参加いただく懇親会も予定しております。後援会会員の皆様におかれましては、是非ご出席くださいますようお願い申し上げます。

日程:2026年7月3日(金)
時間:18時00分～20時45分(予定)
場所:ANAインターコンチネンタルホテル東京
備考:要事前申し込み

※詳細は、後援会よりお送りするご案内をご覧ください。



2025年度後援会総会の様子

大学同窓会 楓美会より

かえで祭における 楓美会の交流と活動

楓美会のかえで祭に参加し、在学生と卒業生の交流を推進しております。卒業生である楓美会員どうしはもちろん、一般のお客様ともお話しできる貴重な機会と捉えております。

年代を超えて学生時代の思い出を語り合えるひとときは、同窓会ならではの魅力です。また、楓美会基金の活動として楓美会オリジナルのメイプルリーフグッズを用意し、多くの方に喜んでいただけたことも今後の活動の励みとなっております。

※楓美会基金は学生の支援や会の運営に活用させていただきます。



2025年11月かえで祭にて

学院同窓会より

新しい同窓会を目指して

昨年度学院同窓会総会で承認され、新しい同窓会の形を目指し準備を進めてまいりました。本年6月の総会で「一般社団法人東洋英和女学院同窓会東光会定款(案)」の承認を諮る運びとなっております。現在の任意団体を卒業し、運営基盤の整備、活動の安定化、会計管理の透明化を目指します。

1895年に発足した同窓会は「敬神奉仕」の教えを守り、神に祈り人に仕えることを大切にこれからも活動してまいります。法人化の検討にあたり学院のご協力に感謝申し上げます。



一般社団法人化委員会代表メンバー